

ルカによる福音書10章 「弟子として生きる祝福」

1A 遣われた者たちの祝福 1-24

1B 宣教の命令 1-16

1C 受け入れる人々 1-9

2C 拒む者たち 10-16

2B 宣教の報告 17-24

1C 天に記されている名 17-20

2C 御父の示される啓示 21-24

2A 人々に仕える祝福 25-42

1B 隣人への助け 25-37

2B 御言葉への傾注 38-42

本文

私たちの聖書の学びはルカによる福音書 10 章に入ります。前回、9 章においてイエス様は十二弟子にご自分の權威を与えて、遣わされました。そこで十二弟子が、後々に教会の指導者として立つための訓練を施しておられました。五千人の給食はそれに当たります。それから、イエス様はご自身がキリストであるというペテロの告白に基づき、そのキリストである方が人々に裏切られ、殺され、しかし三日目に甦られることを語られました。そのキリストに私たちがついて行く者である、つまり、自分を捨てて、日々、自分の十字架を背負い、それで付いていきます。けれども、弟子たちがそのことをまだ理解しておらず、仲間ではないとして悪霊の追い出しをやめさせたり、サマリアの人たちがイエス様を拒んだために、天から火を降らせようとしたりと、まだまだ分かっていない姿が見えます。

1A 遣われた者たちの祝福 1-24

10 章も、イエス様の訓練の姿が続きます。十二人を越えて、さらに多くの弟子たちにご自分の働きを任せるようにされます。私たちの教会も、この只中にいることを覚えてください。イエス様が私たちに教え、指導し、導いておられます。

1B 宣教の命令 1-16

1C 受け入れる人々 1-9

1 その後、主は別に七十二人を指名して、ご自分が行くつもりすべての町や場所に、先に二人ずつ遣わされた。2 そして彼らに言われた。「収穫は多いが、働き手が少ない。だから、収穫の主にご自分の収穫のために働き手を送ってくださるよう祈りなさい。

十二人とは別に七十二人を指名されています。ちなみに、他の写本や以前の改訂訳の訳だと七十人になっています。七十人ですと、旧約聖書で神はイスラエルを十二部族に分け、さらに七十人の長老がモーセのところにいました(出エジプト 24:1)。それと同じに構成になっています。そして二人ずつ遣わしておられます。この方式は、使徒の働きにもありますね、ペテロは一人ではなくヨハネと共に、パウロは一人ではなくバルナバと共に行きました。バルナバと決裂した後は、シラスと共に宣教旅行に行きました。

そして、ここで七十二人を遣わしている理由をイエス様が語られています。「収穫は多いが、働き手が少ない。だから、収穫の主に、ご自分の収穫のために働き手を送ってくださるよう祈りなさい。」主が、収穫が多いと言われていました。しかし働き手は少ないです。これは、必ずしも目に見える形で、収穫が多いとは限りません。主が大きな収穫をしたいと願われているとも読むことができます。キリストは罪人を救うために、この世に来られました。この神のみこころに、私たちがどれだけ服しているか？が、大きな課題です。私たちの祈りは、御心が何でしょうという自分中心のものではなく、すでに示されている御心に、自分が従順に応答できるかどうか？ということです。つまり、主の収穫の働きのために、自分はどれだけ働き人となることができるのか？ということです。

3 さあ、行きなさい。いいですか。わたしがあなたがたを遣わすのは、狼の中に子羊を送り出すようなものです。

これは何か？宣教に遣わされるのは、敵対的なところに遣わされるということです。主がイザヤを遣わされる時に、なんとこう言われたのです。「6:9-10 すると主は言われた。「行って、この民に告げよ。『聞き続けよ。だが悟るな。見続けよ。だが知るな』と。この民の心を肥え鈍らせ、その耳を遠くし、その目を固く閉ざせ。彼らはその目で見ること、耳で聞くことも、心で悟ることも、立ち返って癒やされることもないように。」」主に導かれるとは、みなぎ心を開くからというのは勘違いで、福音には全般的に敵対的なところに、主は敢えて遣わされます。神の国が来るということは、サタンの国に入り込み、それを征服することに他なりません。ですから、反撃が来ることは当たり前なのです。

そこで大事なことは、「狼の中に子羊を送り出す」ということです。私たちは子羊のような存在で、霊的に武装していなければ餌食にされてしまいます。ですから注意深く動く、賢く動くことが求められます。

4 財布も袋も持たず、履き物もはかずに行きなさい。道でだれにもあいさつしてはいけません。ここは、「履き物もはかずに」と訳したほうがよいでしょう。つまり余計な靴は用意しないように、ということです。5 どの家に入っても、まず、『この家に平安があるように』と言いなさい。6 そこに平安の子がいたら、あなたがたの平安は、その人の上にとどまります。いなければ、その平安はあ

あなたがたに返って来ます。7 その家にとどまり、出される物を食べたり飲んだりしなさい。働く者が報酬を受けるのは当然だからです。家から家へと渡り歩いてはいけません。8 どの町に入っても、人々があなたがたを受け入れてくれたら、出された物を食べなさい。9 そして、その町の病人を癒やし、彼らに『神の国があなたがたの近くに来ている』と言いなさい。

ここでイエス様が語られているのは、高い使命を持ちなさいということでしょう。挨拶をしてはいけないというのとは、使命以外のことで気が逸らされてはいけないことを教えています。アブラハムのしもべが、イサクのお嫁さんを探す時のことが参考になります。彼は、その使命を果たすことだけに集中していました。そして、当時は旅人を迎える習慣があったので、それで彼らも、自分たちが福音の使者だということだけで受け入れてくれるのであれば、その人たちに平安が留まりますとイエス様は言われます。そしてそうでなくとも、彼らにはその平安が留まっています。どちらにしても、神の平安のうちに守られるという事です。食べ物も、そのことで家々を回ったりすることなく、福音を語ることに集中できるように備えられることを約束されています。そして、病人を癒しながら、神の国を宣べ伝えます。これは、当時、本当に困っていた中で病人を癒すという良い行いによって、神の国が来たことを伝えます。私たちが癒しを求めたいです、ただそれだけでなく、神の国が現実にあるのだという良い行いに満ちたいです。

2C 拒む者たち 10-16

10 しかし、どの町であれ、人々があなたがたを受け入れないなら、大通りに出て言いなさい。11 『私たちは、足に付いたこの町のちりさえ、おまえたちに払い落として行く。しかし、神の国が近づいたことは知っておきなさい。』12 あなたがたに言います。その日には、ソドムのほうが、その町よりもさばきに耐えやすいのです。13 ああ、コラジン。ああ、ベツサイダ。おまえたちの間で行われた力あるわざが、ツロとシドンで行われていたら、彼らはとうの昔に粗布をまとい、灰をかぶって座り、悔い改めていたことだろう。14 しかし、さばきのときには、ツロとシドンのほうが、おまえたちよりもさばきに耐えやすいのだ。15 カペナウム、おまえが天に上げられることがあるだろうか。よみにまで落とされるのだ。

自分たちを受け入れる町もあれば、そうでない町もあります。拒む者たちに対して行なうべきことです。一つは、足の塵を払い落とすことです。これは使徒パウロが実践している姿が、使徒の働きで認めることができます(使徒 13:44-52)。これは、主の言葉を語ったのだから、自分たちには責任がないことを示すものです。私たちの責任は、人を悔い改めさせることではありません。悔い改めなさいと宣べ伝えることです。ですから、宣べ伝えなければ災いにあうと、パウロは第二コリントで話しました。宣べ伝え、その後は神が聞いている者たちに対して裁かれます。

それが、退廃しきっていたソドム、また厳しい裁きが宣言されているシドンよりも厳しい裁きであるということです。なぜか、ソドムやシドン以上に、はるかに多くの知識が与えられたからです。主

の裁きは、人がどれだけ悪いことをしているか？ということではありません。どれだけ、与えられた知識に対して責任をもって応答したか？ということなのです。例えば教会に足を一度も運ばなかった人がことさらに重い罪を背負い、教会に足を運んだ人は軽い罪で済む、ではないのです。もし福音に応答しないのであれば後者のほうが、罰が重いのです。

16 あなたがたに耳を傾ける者は、わたしに耳を傾け、あなたがたを拒む者は、わたしを拒むのです。わたしを拒む者は、わたしを遣わされた方を拒むのです。」

福音宣教において、いつも知らなければいけないことです。自分が福音を語っているのは、イエスの御名による権威なのだということです。私たちが拒まれると、まるで自分自身が攻撃されたと思いがちですし、拒む人はいつもそのように言います。けれども、そうではなく自分の宣べ伝えている人が、イエス様を拒んでいるから拒んでいるのです。ちょうど、私たちは警察官のような存在です。自分自身には権威はないです、けれども権威がキリストから賦与されて、その権威によって人々をキリストへと導きます。どんな小柄な女性でも、警察官はその制服があるので、何トンもするトラックを制止することができます。それは、トラックがその婦人警官に従ったのではなく、その服装が表している日本国の権威に対して従ったのです。

2B 宣教の報告 17-24

1C 天に記されている名 17-20

17 さて、七十二人が喜んで帰って来て言った。「主よ。あなたの御名を用いると、悪霊どもでさえ私たちに服従します。」18 イエスは彼らに言われた。「サタンが稲妻のように天から落ちるのを、わたしは見ました。19 確かにわたしはあなたがたに、蛇やサソリを踏みつけ、敵のあらゆる力に打ち勝つ権威を授けました。ですから、あなたがたに害を加えるものは何一つありません。20 しかし、霊どもがあなたがたに服従することを喜ぶのではなく、あなたがたの名が天に書き記されていることを喜びなさい。」

七十二人が戻ってきました、宣教報告をしています。使徒の働きにも、宣教報告の話が出ています。パウロとバルナバが、宣教に行き、戻って来て、自分たちを遣わしたアンティオキアの教会で報告をします。エルサレムで会議が行われた時も、彼らに異邦人の中に働く神の恵みを分かち合いました。

そしてイエス様が、霊の戦いが繰り広げられていたことを彼らに伝えられます。「サタンが稲妻のように天から落ちるのを、わたしは見ました。」と主は言われます。黙示録 12 章にて、天における戦いで、竜と三分の一の星が天から落ちる話が出て来ます。サタンは天から落ちて、地上で暴れ、最後は底知れぬ所に縛られて、火と硫黄のゲヘナに投げ込まれることが定められています。私たちが福音宣教をして、人々が神のものになっていく時に、同じようにしてサタンが戦いに敗れ、次

第にその滅びに近づいて行くことを知ることができます。そして、「蛇やサソリを踏みつけ」る権威が与えられていることも教えておられますね。これも終わりの日に行われることなのです。主が、罪を犯したアダムとエバの前で、蛇に対して「かしらを打つ(創世 3:15)」という約束があります。キリストが死なれて、甦られ、蛇の頭を打たれました。それから、キリストに付く者たちが、自分たちの足でこれら悪の勢力を踏みつける約束があります。「ローマ 16:20 平和の神は、速やかに、あなたがたの足の下でサタンを踏み砕いてくださいます。」

けれども、自分がその天において名が記されていることを喜びなさいと主は言われるのです。そう自分たちが力で制することのできる働きよりも、もっと大きな喜びは父なる神の前に大胆に出て来ることができるという喜びです。働きよりも、関係性がもっと大事なのです。

2C 御父の示される啓示 21-24

21 ちょうどそのとき、イエスは聖霊によって喜びにあふれて言われた。「天地の主であられる父よ、あなたをほめたたえます。あなたはこれらのことを、知恵ある者や賢い者には隠して、幼子たちに現してくださいました。そうです、父よ、これはみこころにかなったことでした。22 すべてのことが、わたしの父からわたしに渡されています。子がだれであるかは、父のほかはだれも知りません。また父がだれであるかは、子と、子が父を現そうと心に定めた者のほかは、だれも知りません。」

イエス様が、聖霊に満たされて喜んでおられます。かつて、イエス様をみごもったマリアを見て、エリサベツが聖霊に満たされて喜びましたが、今度は主ご自身が喜んでいます。それは、父なる神がこの弟子たちにご自身を現わしておられることです。

午前礼拝で、主ご自身の啓示によってのみ、私たちは神を知ることができることを学びました。ここに私たちがどれだけ、主の御心の中に留まることができるかが試されています。私たちはいつも、どうしてこうなったのか？どうやれば、人が増えるのか？どうして人は信仰から去って行ってしまおうのか？いろいろ考えてしまいます。もちろん、私たち自身が主にあってどうだったのか、絶えず吟味しなければなりません。究極的には主ご自身がなされていることです。

23 それからイエスは、弟子たちの方を振り向いて、彼らだけに言われた。「あなたがたが見ているものを見る目は幸いです。24 あなたがたに言います。多くの預言者や王たちは、あなたがたが見ているものを見たいと願ったのに、見られず、あなたがたが聞いていることを聞きたいと願ったのに、聞けませんでした。」

イエス様は、ここで主ご自身が彼らに現れておられることを、幸いです！と喜んでおられます。旧約の時代には、数多くの預言者が主から幻を受けました。しかし、ダニエル書には、幻は示されてもどうということなのか悟れずに、悩んでいるダニエルの姿が出て来ます。けれども、御使いからこう

命じられます。「12:4 ダニエルよ。あなたは終わりの時まで、このことばを秘めておき、この書を封じておけ。多くの者は知識を増そうと捜し回る。」また、王たちも悩めます。ダニエル書には、ネブカドネザル、ダリヨス、キュロス王などが出て来ますが、将来はどうなるのかと悩みました。けれども、ここにいる小さき弟子たちに、彼らが見たいと願っていた方、キリストがおられるのです！

ペテロが、このことと同じことを言い表しています。「I ペテ 1:11-12 彼らは、自分たちのうちにおられるキリストの御霊が、キリストの苦難とそれに続く栄光を前もって証したときに、だれを、そしてどの時を指して言われたのかを調べたのです。彼らは、自分たちのためではなく、あなたがたのために奉仕しているのだという啓示を受けました。そして彼らが調べたことが今や、天から遣わされた聖霊により福音を語った人々を通して、あなたがたに告げ知らされたのです。御使いたちもそれをはっきり見たいと願っています。」私たちも、このキリストの時代に生きていることを思いください、幸いであり、恵みなのです。この時代がいつまでも続くのではなく、主が天から降りて来られる時、携挙にはその機会は失われるのです。

2A 人々に仕える祝福 25-42

1B 隣人への助け 25-37

25 さて、ある律法の専門家が立ち上がり、イエスを試みようとして言った。「先生。何をしたら、永遠のいのちを受け継ぐことができるでしょうか。」

神を知ることのできる幸いを弟子たちにイエス様が語っておられた時に、この律法学者は、自分は知っていると思っていたのでしょうか。そして、イエス様に挑戦するために、どうすれば永遠のいのちを受け継ぐのか？と尋ねています。あなたの弟子たちにはそのような救いの知識はないが、私にはあるという自負があったのかもしれませんが。

26 イエスは彼に言われた。「律法には何と書いてありますか。あなたはどう読んでいますか。」27 すると彼は答えた。「『あなたは心を尽くし、いのちを尽くし、力を尽くし、知性を尽くして、あなたの神、主を愛しなさい』、また『あなたの隣人を自分自身のように愛しなさい』とあります。」28 イエスは言われた。「あなたの答えは正しい。それを実行しなさい。そうすれば、いのちを得ます。」

律法の専門家は、主ご自身が後に、律法の中で最も大切な掟として挙げられる二つの戒めを取り上げました。神を愛し、また自分自身のように隣人を愛するという関係性の中に、永遠の命、霊的な命があるのだとしました。それで、イエス様はただそれを実行しなさいと言われます。

29 しかし彼は、自分が正しいことを示そうとしてイエスに言った。「では、私の隣人とはだれですか。」

律法の専門家は、自分を正しいと示そうとしました。まず、イエス様にそれを実行しなさいと言われたので、あたかも実行していないかのような形で終わらせられたと感じたのかもしれませんが、人は、自分がどれだけ出来ているかを示したいと願います。自分の正しさを示したいと思います。

30 イエスは答えられた。「ある人が、エルサレムからエリコへ下って行ったが、強盗に襲われた。強盗たちはその人の着ている物をはぎ取り、殴りつけ、半殺しにしたまま立ち去った。31 たまたま祭司が一人、その道を下って来たが、彼を見ると反対側を通り過ぎて行った。32 同じようにレビ人も、その場所に来て彼を見ると、反対側を通り過ぎて行った。33 ところが、旅をしていた一人のサマリア人は、その人のところに来ると、見てかわいそうに思った。34 そして近寄って、傷にオリーブ油とぶどう酒を注いで包帯をし、自分の家畜に乗せて宿屋に連れて行って介抱した。35 次の日、彼はデナリ二枚を取り出し、宿屋の主人に渡して言った。『介抱してあげてください。もっと費用がかかったら、私が帰りに払います。』36 この三人の中でだれが、強盗に襲われた人の隣人になったと思いますか。」37 彼は言った。「その人にあわれみ深い行いをした人です。」するとイエスは言われた。「あなたも行って、同じようにしなさい。」

自分の正しさを示そうとする人に対して、イエス様は、そのようにしなさいと勧めることによって、まことの命を示そうとされます。金持ちの青年の時も、そうでしたね。全財産を売って、貧しい人に施しなさいと言われました。

ここは、エルサレムからエリコに下る道です。死海またヨルダン川に向けて、一気に降下して、世界でもっとも低い陸地である、ヨルダン溪谷へと進みます。ここは危険な道で、しばしば盗賊が出て来ます。この半殺しにあった人も例外ではありませんでした。イエス様は、自分を正しいと思っている彼に、まるで鏡のようにして、レビ人と祭司を登場させています。彼らは素通りしています。これは、よくある光景だったのでしょうか。律法を守ることに忙しくて、周囲に目が向かないことは、今の超正統派の人たちを見ても伺うことできるものです。

しかし、ここで愛の行いをしたのは、サマリア人でした。自分を正しいとしている律法の学者は隣人愛を示さず、むしろユダヤ人が憎んでいるサマリア人がそれを行った、ということです。9章で、サマリア人とユダヤ人が敵対関係にあるのを学びましたね。自分の敵であるサマリア人が、むしろ半殺しの人を手当てしました。彼がまるで、この戒めを守れていないことを示されたのです。ここが大事です、人間としての愛が枯渇した時に、その時にこそ、キリストの愛によって隣人を愛するのだということです。ここで大事な言葉は、「かわいそうに思った」であります。この言葉は、福音書では常に、イエス様ご自身の行動に使われたものです。つまり、イエス様ご自身の思いをこのサマリア人が抱いて、それで行っています。自分の愛、人間の愛がどれだけ自己中心的で、自分自身のためのものか知れません。しかし、その時こそ、イエス様の中に永遠の命があり、この方に満たされることによって、初めて隣人を愛することができるのです。

そして、イエス様が律法の専門家に、「だれが、強盗に襲われた人の隣人になったと思いますか。」と問われていることです。隣人はだれですか？という問いに対して、憐れみを受けた人を隣人とするのではなく、逆にしてイエス様は、この憐れみをかけたほうが隣人として話しておられることです。その半殺しにされてしまった人にとって、手当てを丁寧にして、自分の家畜に彼を載せて、宿代まで責任をもって支払っています。最後の最後まで、責任をもって彼の必要に仕える時に、それが愛の行いであり、そばにいた人になったのです。愛するというと、どうしても感情だけの話になってしまいます。けれども、愛とは、最後まで仕えることであり、そして隣人とは、最後まで一緒にいる人だということです。

2B 御言葉への傾注 38-42

そして最後の話に入ります。有名な、マルタとマリアの話です。これが、サマリア人の話の次に来ていることも大事です。なぜなら、良きサマリア人の話によって、隣人を愛するとは人に仕えることなのだということです。次に、その仕えるということですが、それはすばらしい愛の行為の中にも、本質を見失ってはいけない話になっています。

38 さて、一行が進んで行くうちに、イエスはある村に入られた。すると、マルタという女の人がイエスを家に迎え入れた。39 彼女にはマリアという姉妹がいたが、主の足もとに座って、主のそばに聞き入っていた。40 ところが、マルタはいろいろなもてなしのために心が落ち着かず、みもとに来て言った。「主よ。私の姉妹が私だけにもてなしをさせているのを、何ともお思いにならないのですか。私の手伝いをするように、おっしゃってください。」41 主は答えられた。「マルタ、マルタ、あなたはいろいろなことを思い煩って、心を乱しています。42 しかし、必要なことは一つだけです。マリアはその良いほうを選びました。それが彼女から取り上げられることはありません。」

マルタ、マリア、そしてラザロの家です。ベタニアにあります。エリコからエルサレムに上る道、エルサレムに近いところにこの町があります。イエス様は、この三人と親愛な仲になっておられました。彼らもイエス様を愛して、そしてイエス様も彼らを愛しておられたことが、ヨハネ 11 章の中に書いてあります。ですから、ここでマルタが動いていますが、彼女が律法の専門家のように、行いによって正しさを示そうとしているような類いのものではありません。そうではなく、マルタもマリアもどちらもイエス様に愛されて、マルタは、その愛に応答して主に仕えているのです。マルタは、事に仕える人ですね。給仕をしていて、いろいろな事に仕えています。主を愛し、主のために手を汚すということ。これは、とても高く評価されるべきことです。教会には、このような人々がとても大切です。そして私たちは一人一人、何らかのかたちでマルタのように給仕すべきです。

けれどもマルタの問題は、「心が落ち着かず」というところです。主のために仕えていることが、主の御足の前で御言葉を聞くという、礼拝に取って変わるものではありません。主のために、いろいろなことに気遣い、それをこなしていくことはすばらしいことです。けれども、主の御足のところに

座る、つまり礼拝して、そして御言葉を聞く時間にはとって変わるものではないのです。そして、彼女の心は、主であるイエス様ご自身に、マリアに何とも言わないことをなじるところまで、行ってしまいました。主に対して、その言葉を聞くことが最も大切なことです。しもべなのですから、なのに、今、主であられる方に対して、自分が主人のようにしてなじっているのですから、本末転倒になるのです。そんなマルタに対して、イエス様は厳しくなさらずに、むしろ親愛の情を向けておられます。「マルタ、マルタ」と二度、名前を呼ばれていますね。聖書には、さほど多くそういった場面はありません。けれども、呼ばれている時は、相手に対する親愛の情を込めている時です。

ところで、マリアは興味深い人です。そのイエス様に傾注する姿勢が、誤解されたり、他者の批判の的になってしまうことです。香油をイエス様に注いだ時も、なぜそんな高価なものを無駄にするのかと弟子たちに責められました。イエス様はいつもその時に、かばってくださいます。

ここで大事な言葉があります。「しかし、必要なことは一つだけです。マリアはその良いほうを選びました。」必要なことは多くない、いや、一つだけです。何が必要でそうでないかを、私たちは主に仕えている中で見極める必要があります。真面目になっていろいろ行なうけれども、実は、主に命じられていないこともあるのではないのでしょうか？けれども、それも主のためにしていると思ってしまう。けれども、必要なことは一つだけ、ということをお出ししてください。その良い方をマリアが選びましたが、それが礼拝です。

こうやってみますと、初めから終わりまで一貫した話になっています。弟子として生きる時の最も大切なことは、天に自分の名が書き記されていることを最も大きな喜びとしている事。他にもいろいろなことが起こるでしょう、でもイエス様にあって神に知られ、認められていることを知ることです。そして、自分の愛はちっぽけで、自分の愛が枯渇した時に初めて、キリストの愛に満たされることを求めて、隣人を自分自身のように愛せるということ。そしてその愛は、最後まで仕えることにあります。けれども、その愛の中で仕える時に、イエス様の御足のところで座って、御言葉を聞くということが最も大切あること、礼拝が最も大切なことです。イエス様と共に歩む生活は、そういった意味で身軽ですね。主に任せ、主と共に歩む生活です。